「神の畑、神の建物」　宗教改革記念日　　2022 年 10 月 30 日

コリントの信徒への手紙一３：１～９

佐々木　佐余子

パウロが遣わされたコリントの町は、既に学んだように、地中海に位置するギリシャの都市でした。対岸にある町はアテネです。その当時世界はローマ大帝国の時代でした。「ローマは一日にして成らず」とあるように、５００年もかけて大帝国が築かれたのです。また「すべての道はローマに通ず」とあるように、世界の目がローマに注がれ、地図を見ると世界各地の道がローマに向かって作られていたのです。ローマ皇帝は神でした。そのころユダヤはローマの属領だったので、本当に田舎の寒村の伝道者が、コリントで伝道することが、どれだけの勇気と神の使命感に燃えていなければ伝道出来なかったのではないかと想像します。このコリントは現在コリンソスとなっていますが、パウロの時代はギリシャの最大の貿易港であり、商業地であり、多様な人種・民族が居住し少なくとも２０万人の自由人、自由人とは市民権を持っている人です。４０万人以上の奴隷によって構成されていたコスモポリタン国際都市であったのです。貧しい奴隷たちと対照的に裕福な者はますます富み栄えヘレニズム文明それはギリシャ・ローマの世界観ですが、その文化が謳歌していました。奴隷はいても当たり前の世界でした。そして、神殿に仕える女性たちも多く、道徳的倫理的に見ても「虚栄と廃退の町」と言われていたのです。そのような町にパウロは送られ、「伝道せよ」と使命を与えられたのでした。パウロの書簡を読むと、２０００年前のコリントの教会の実情と今の日本の置かれた教会の現状と似ていることに驚きます。それは他宗教の共存した文化があるという意味で似ているのです。

パウロは、元々は熱心なユダヤ教徒なのでその町のユダヤ教の会堂を借りて福音を伝えたのです。信じる人が起こされると、裕福なクリスチャンの家を借りて集会を始めました。ですから一つの家に留まるのではなく、場所を変えて家庭集会のように廻って伝道したのではないでしょうか。

３章１節に「兄弟たち、わたしはあなたがたには、霊の人に対するように語ることができず、肉の人、つまり、キリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように語りました」とあります。ここでパウロは牧会的配慮をします。コリントの集会に来る人達はまだ信仰が浅く固い食物は食べることが出来ないでいる。それは、信仰の浅い人に、いきなり神の奥義・秘儀イエス・キリストの十字架と復活を語っても理解できないでしょう、と言っているのです。ですから柔らかい乳を与えたと言っています。それは想像するに多分、イエス・キリストの愛の行い、病んでいる人への癒しや奇跡という誰もが望んでいるお話ではないでしょうか。３節に「相変わらず肉の人だからです」とあります。集会に来ている人たちは、福音を聞いたからと言ってすぐ霊の人になれるわけではありません。すぐ信じて霊の人になれる人もいるかもしれないけど多くは時間がかかるのです。ですから「お互いの間にねたみや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということ

になりはしませんか」と手紙を読んでいる人たちに問うています。4節にアポロという人物が出てきます。この人は一体どのような人なのでしょうか。パウロと肩を並べられるような人なのでしょうか。アポロはエジプトのアレキサンドリア生まれのユダヤ人ですが、このアレキサンドリアはエジプトにおいて大変栄えた町だったのです。ユダヤ人も多く住んでおり、迫害から逃れたユダヤ人は旧約聖書を紀元前３世紀ごろのことですが、ヘブル語の旧約聖書をギリシャ語に訳したのです。これは７０人訳（セプトゥアギンタ）と言われていますが、何でもユダヤ人が７０人で翻訳に取り掛かったのでそう呼ばれているということです。ですからアポロは聖書に詳しく雄弁家なのでした。アポロがエフェソで伝道していた時、イエスさまのことを熱心に語ってはいたけれども、プリスキラとアキラはその話を聞いて、少し違和感を覚えた。それで彼らはアポロを招いて、もっと正確に神の道を説明したのです。それからアポロは聖書に基づいて、メシアはイエスであると言い、激しくユダヤ人を説き伏せたのです。（使徒言行録 18:24~28）　ですけどアポロの欠けは、あくまで洗礼者ヨハネの悔い改めなければ滅びるという信仰であり、主イエスの名によって洗礼を受ける、そして聖霊が与えられるという信仰が欠如していたのかもしれません。何しろバプテスマのヨハネの洗礼を受けていた人ですから。でもアポロがパウロと比べられるほどの力を持っていたのです。しかし、力があると言っても所詮は亜流の福音だったのです。しかし、パウロは寛容であり「あなたは二流だから」と言わなかったのです。そこが大使徒ですね。6節ご覧ください。「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です」と言います。本当に謙虚な使徒です。8節に「報酬を受け取ることになります」とありますが、その報酬とは何でしょうか。この世の報酬でしょうか。お礼でしょうか。人々から受ける尊敬でしょうか。或いは人気でしょうか。神さまは一人一人の働きによって、成果によってではなく伝道の実があった、というのでなく、各自がコツコツと一生懸命する労苦や忠実さに応じて、主は報いられるのです。それは9節にあるように、「わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです」と言っている通りです。

今朝は宗教改革記念日ですので、神が耕した畑、神が築いた家をより真実なものに労苦した宗教改革者について学びを与えられたいと思います。宗教改革者として良く知られている人はマルティン・ルターではないかと思います。今ドイツの家庭ではこの神学者・牧師の肖像画が居間に置かれているということです。国民的な英雄として広く知られているそうです。この方は学生の頃から秀才だったそうですよ。親は期待をかけ将来は法曹界や医者・弁護士になってもらいたいと思っていたそうです。ところが神はこのような人に目を留められました。神はこの人がただ頭脳がいいと思ったからではなく、頭脳のいい人は他に多くいたのです。神はこの方の信仰に目を向けられたと思います。マルティン・ルターは１４８３年アイスレーベンという町に生まれました。父は農民でしたが、親のしつけは厳しいものでした。クルミを一つ盗んだだけで、母から血が出るまで鞭打たれたのでした。彼が大学生の時、激しい雷雨にあい、恐怖のあまり、もし命が助かれば修道士になることを誓ったので

した。この体験によって修道院に入り、１５０７年２４歳の時聖職を授けられて、最初のミサを捧げたのでした。そして生涯神に身を献げました。もし彼が中途半端な人間だったら、苦しいことがあった時逃げたでしょう。神は初めからこの人間を見抜いておられました。ルターが怒ったのは、ドイツの財産を教皇の物とするために免罪符が悪用されたことでした。その頃のカトリックは堕落しており、ローマ教とも言われていました。初代教会はあれだけの迫害がありながらも抵抗し、やっとローマで国教として認められたのでした（３１３年)。にもかかわらず、教会が権威と財産を所有すると堕落するのです。恐ろしいことです。これでキリストの教会は終わりかと思いきや、神はみ手を伸ばされました。マルティン・ルターを用いられたのです。彼はローマの信徒への手紙１章１７節「福音には、神の義が掲示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『正しい者は信仰によって生きる』と書いてある通りです。」を読んで、キリストを信ずる信仰のみが人を神の前に義とすることが出来ると確信したのです。ローマ教皇が人を義とするのではない、聖書が唯一の権威であると信じました。この信仰は今では当たり前と思いますが、その当時は当たり前ではなかったのです。聖書の前に教皇が座していたのでした。国の教皇対一聖職者の戦いが始まりました。人間的に見たら何と無謀な戦いでしょう。免罪符はその名の通り、人の罪を免れる札です。キリストはいらないのです。お金がその人の罪をなしにするのです。恐ろしい考え方です。ローマ教はここまで落ちました。ルターは１５１７年１０月３１日９５か条の抗議文をウイッテンベルクにあるシロ教会の扉に掲示したのです。弱冠３４歳の時でした。この条文の中で免罪符の悪用を排斥し、議論したいなら誰でも来なさいと挑戦しました。そして、神はメランヒトンという神学者を遣わしました。彼はルターを支持し大いに助けたのでした。またフリードリヒというザクセン候を後ろ盾に付かせました。彼がいなければ、ルターはドミニコ会士たちに論破されていたでしょう。論争に勝つことは簡単ではなかったけれど神が味方したのです。ルターは、牧師は国からあてがわれるのではなく、信者は誰でも自分の牧師を選ぶ権利があると主張しました。またすべての信者は祭司である、礼典は聖餐式とバプテスマのみが大事であり、その他の事、終油を死者に塗ることや結婚式は礼拝の礼典ではないとしたのです。一時ルターは身の危険を感じたけれど、友人たちはルターをヴァルトブルグ城に匿い保護したのです。彼は保護された城で、ギリシャ語で書かれた新約聖書をドイツ語に訳しドイツ人が誰でも読めるようにしたのです。農民との対立はありましたが、それを乗り越えて、ルターは確かに後世にまで影響を及ぼした偉大な人でした。讃美歌でこれから歌う「神はわがやぐら」はルターが作詞し作曲したのです。１５３０年４７歳の時、ドイツ人が自国語で聖書を読めるようにドイツ初等教育制度を作ったのです。ですから一般義務教育の始まりはルターの努力の成果でした。信者は祭司であるので、各個人で聖書を読み信仰を養われねばならないと教えたのです。ただルターは信条を余りにも大事にしすぎて、やや冷たい正当主義に至り、大事な霊的な面を見過ごしてしまいがちになっていました。１７世紀にそれに対抗して敬虔派が起こって、聖書研究と祈りとを大事にしたのはルター派に反動したと言えるのではないでしょうか。敬虔主義はシュペーナに

よって引き継がれ日本のプロテスタントの諸教会の多くが敬虔主義の影響下にあるということです。有名なのはモラビア兄弟団でしょうか。ジョン・ウエスレーも旅の途中モラビア兄弟団と出会い、強い影響を与えられたと言われています。モラビア派は聖書のみに基づいた信仰に立ち生活そのものをお互い信徒同士の交わりの場としたそうです。昔、ある人からピューリタニズムも敬虔派なのでしょうかと質問されたことがあって、思い出したのですが、ピューリタニズムもドイツ敬虔派の影響を受けているということです。やはり教会はいろいろな信条も大事だけれど、神さまとの霊的な交わり、祈りといった霊性面も豊かにされて教会生活を送りたいものです。

ルターは神の畑をキリストの畑とし、神の建物を掃除した人です。教会も神の働く畑であればそこにおられる私たち一人一人は、キリストに養われて成長するようにお互い牧会しあい、聖霊をいただいて良き畑、建物となるよう尽くしたいと思います。